



『精神神経学雑誌』は、1902（明治35）年の日本神経学会の発足とともに『神経学雑誌』として第1巻第1号が刊行された。現在（2022年）の第124巻はこのとき以来の連番である。『日本精神神経学会百年史』の第3章「機関紙『神経学雑誌』の歴史（松下ほか）」によると、和名は『神経学雑誌』でも、当初から外国語表記は『Neurologia, Ein Centralblatt für Neurologie, Psychiatrie, Psychologie und Verwandte Wissenschaften』であり、扱う対象は神経学に限らず、精神医学、心理学、およびその関連科学を包含することが明示されていた。

学会は1935（昭和10）年に日本精神神経学会と改称され、雑誌名も『精神神経学雑誌』と変更された。『日本精神神経学会百年史』の付録のCD-ROMには創刊から2001年までの100年間の論文目録が収録されている。試みに戦中戦後を通覧すると、1945年こそ刊行が途絶えているが、早くも1946年には再開されている。

翌々年1948年50巻には後に高名な文芸評論家となる加藤周一の論文が見られる。「キニーネの神経精神機能に与える影響」というタイトルで、所属は東京大学医学部佐々内科教室である。内容は、医師と医学生計5名にキニーネをマラリア治療法に準じて服用させ、腱反射や知覚の変化とともに、注意、計算、記憶などの高次機能の変化を種々の尺度を用いて測定したもので、そっけないほど簡潔で淡々とした筆致だ。血液学者だったと読み知っていたが、なぜこのような論文を書いたのか。神経梅毒マラリア発熱療法を終結のためにキニーネが必須だった当時において、有意義な研究ではあっただろう。

1954年55巻には、「日本精神医学の過去と将来」と題する内村祐之による第50回総会記念講演が収録されてい

る。ドイツ精神医学の発展を座標にとりながら、日本の精神医学の歴史と現在を検証したあとに、将来に向けて論が展開される。当時、アメリカの影響があらゆる領域で強大であったことは想像に難くないが、その精神医学は日本とはまったく異なるものだった。「力動精神医学のなんであるかを誤りなく理解し、かつこれを批判することが、現在の日本精神医学に課せられた大きな問題」と捉え、文献を参照しながらアメリカにおける力動精神医学の特徴を整理したうえで、学問としては方法論の限界についての見解を問い、治療法としてはその有効性を他との比較において吟味する必要性を指摘している。戦後のある時点での展望が現在に通じる射程と普遍性をもっている。

通覧するほどに興味を惹かれる論文は枚挙にいとまがない。ときにはバックナンバーを開いて古い論文を読むのも面白い。まさに故きを温ねて新しきを知る、の思いである。この歴史と伝統を誇る『精神神経学雑誌』の編集長を119巻10号から本巻本号まで務めた。浅学非才を痛感することばかりだったが、多くの素晴らしい論文の誕生に立ち会えたのは幸せなことだった。在任中の編集委員会では、症例報告における同意取得の義務化、投稿資格の会員外への開放、電子ジャーナル1年後無料公開化、著者資格の明文化、誌面刷新などに取り組んだ。これらの変革が今後の雑誌の発展につながることを祈っている。少しずつ入れ替わったが総勢20名前後の編集委員、数名の編集事務局員、そして学会事務局職員に感謝する。また、論文をお寄せいただいた方々、査読をお引き受けくださった方々、そして読者のみなさまに心から御礼を申し上げる。

（大森哲郎）